

新羅の堤上奈麻と奈勿三王子

高 寛 敏

はじめに

新羅訥祇王(奈勿長子)代(417~458)、高句麗と倭に抑留されていた訥祇王の二弟を救出し、自らは倭で犠牲となった堤上の事件は、高句麗広開土王の南征とも直接に関係し、4世紀末~5世紀前半の高句麗・新羅・倭の相互関係を究明するうえで、貴重な史料となる。

ところが、堤上事件について記した『三国史記』(以下『史記』)・『三国遺事』(以下『遺事』)・『日本書紀』(以下『書紀』)には所伝に相違点が少なくなく、そのため基本的事実の確定も困難なのが実状である。先に筆者は、『広開土王碑文』永樂10年条の解釈と解連づけてこの問題に関する私見を提示し、史実としては『史記』に依拠すべきことを説いたことがある⁽¹⁾。それは今でも誤っていないと確信するが、それは上述の3所伝を網羅的に検討したものでなく、また各所伝の史料批判も不十分であった。そのことを念頭に、ここでは各所伝の性格を個々に追求しながら、堤上事件をめぐる基礎的事実を明らかにしたいと考える。最も重要な所伝は『史記』であろうから、まずそれから検討することにする。

1. 『史記』の堤上関係記事

『史記』の、堤上とそれに関係する記事を次にあげる。

- (1) (奈勿尼師今)二十七年(392)、春正月、高句麗遣使、王以高句麗強盛、送伊漚大西知子実聖為質。
- (2) (同四十六年-401)秋七月、高句麗質子実聖還。
- (3) (実聖尼師今)元年(402)、三月、与倭国通交、以奈勿王子末斯欣為質。
- (4) (同)十一年(412)、以奈勿王子卜好、質於高句麗。
- (5) (訥祇麻立干即位紀)奈勿王三十七年、以実聖質於高句麗、及実聖還為王、怨奈勿質已於外国、欲害其子以報怨、遣人、招在高句麗時相知人、因密告、見訥祇則殺之、遂令訥祇往、逆於中路、麗人見訥祇形神爽雅、有君子之風、遂告曰、爾国王使我害君、今見君、不忍賊害、及婦、訥祇怨之、反弑王、自立。
- (6) (訥祇麻立干二年-418)、春正月、親謁始祖廟、王弟卜好自高句麗、与堤上奈麻還来、秋、王弟末斯欣自倭国逃還。
- (7) 朴堤上(分注。或云毛末)、始祖赫居世之後、婆娑尼師今五世孫、祖阿道葛文王、父勿品波

(1) 拙稿「永樂10年、高句麗広開土王の新羅救援戦につ

いて」『朝鮮史研究会論文集』所収、27、1990年

珍浪、堤上仕為敵良州干、先是実聖王元年壬寅、与倭講和、倭王請以奈勿王之子末斯欣為質、王嘗恨奈勿王使己質於高句麗、思有以積憾於其子、故不拒而遣之、又十一年壬子、高句麗亦欲得末斯欣之兄卜好為質、大王又遣之、及訥祗王即位、思得弁士往迎之、聞水酒村干伐宝韎・一利村干仇里迺・利伊村干波老三人有賢智、召問曰、吾弟二人質於倭麗二国、多年不還、兄弟之故、思念不能自止、願使生還、若之何而可、三人同對曰、臣等聞敵良州干堤上剛勇而有謀、可得以解殿下之憂、於是徵堤上使前、告三臣之言而請行、(中略)、帰堤上於王所、則流於木島、未幾、使人以薪火烧爛支体、然後斬之、大王聞之哀慟、追贈大阿浪、厚賜其家、使末斯欣娶其堤上之第二女為妻、以報之、初末斯欣之來也、命六部遠迎之、及見握手相泣、会兄弟置酒極娛、王自作歌舞、以宣其意、今鄉樂憂息曲是也。

(1)~(6)の本紀記事と(7)の列伝記事とは、列伝の堤上系譜記事を除くと、内容も人名表記もよく一致している。(7)の「実聖元年壬寅」・同「十一年壬子」も本紀だけでなく、『史記』年表とも一致している。このことから、本紀と列伝は同一の原典に基づいているのではないかと、まず考えさせられる。しかし、本紀の(6)は堤上の官位を「奈麻」としているのにたいし、列伝にはそれがなく、堤上の官職を「敵良州干」としている。これは看過できない相異であって、むしろ本紀と列伝の原典が異なることを示している。このことは昔于老伝によっても傍証される。

昔于老、奈解尼師今之子(分注。或云角干水老之子也)、助賁王二年七月、以伊浪為大將軍、出

討甘文国破之、以其地為郡県、四年七月、倭人来侵、于老逆戰於沙道、乘風縱火、焚賊戰艦、賊溺死且盡、十五年正月、進為舒弗耶(邯)、兼知兵馬事、十六年、高句麗侵北辺、出擊之不克、退保馬頭柵、至夜士卒寒若、于老躬行勞問、手燒薪蕪暖熱之、群心感喜如夾纊、沾解王在位、沙梁伐国旧属我、忽背而歸百濟、于老将兵往討滅亡、七年癸酉、倭国使臣葛那古在館、于老主之、(後略)。

昔于老伝の年次表記には、「助賁王二年」などのように在位紀年によるもの、「沾解王在位」と王代だけを示すもの、「七年癸酉」のように在位紀年と干支を組み合わせたものがある。これは全て原典の相異を反映しているのである。即ち、在位紀年記事には、なかに「沙道」「馬頭柵」など、地理志四・三国有名未詳地分条にその名が記載された地名があるが、それはそれらの記事が新羅本紀の基本原典、つまり真興王6年(545)に編纂された『国史』を、7世紀前半~中葉頃に刪略・改定した「国史」(仮称)を原典としていることを証左しているのであって、事実、それらの記事は本紀記事に正確に対応している。次に「沾解王在位」記事は、王代だけを明らかにした、新羅の周辺小国統合史料を原典としていて、それは本紀には反映されていない。そして「七年癸酉」記事は、六世紀後半以後になったまた別の原典に基づいており、本紀記事と相応しないのである⁽²⁾。列伝編者は、原典記載どおりに年次表記をしているのである。そして「国史」に基づく記事は在位紀年だけを記しているから、「国史」は編年体で、記事ごとに干支を表記するという事はなかった史書であることがわかる。

さて、(1)~(6)の本紀記事は一連のものである

(2) 拙稿『『三国史記』新羅本紀の国内原典について』

『古代文化』所収、46-9~10、1994年

が、それは「国史」に不可欠の記事であったとしてよい。なぜなら、それは訥祗はなぜ実聖を弑して即位したかという説明に直接関わるものであるからである。実聖は奈勿が自分を高句麗に入質させたことを怨み、奈勿王子の未斯欣・ト好を倭と高句麗に追いやり、遂には訥祗をも殺そうとしたが果せず、反って訥祗に弑されたのである。当時の王位継承の根幹に関わる一連の事件だけに、それは「国史」に基づくといえるであろう。

(7)の列伝は、在位紀年と干支で年次を表記している。このことは、列伝の原典が「国史」ではなかったことを証明しているのである。また地理志・良州条には

文武王五年、麟徳二年(665)、割上州・下州地、置歆良州、神文王七年(687)、築城、周一千二百六十步、景德王改名良州、今梁州。

とあって、歆良に州が置かれたのは665年～景德王代(742～765年)で、それ以後は良州・梁州と改められた(李朝時代から現在の梁山)ことがわかるが、(7)の「歆良州」はまさに665年～景德王代を反映しているので、その原典の成立もこの頃と推定されるのである。

本紀と列伝の原典は異なるのであるが、一方、両所伝は年次や内容が一致し、互いに矛盾するところがない。それはもともとの原史料が共通のものであることを示唆している。

列伝原典の原史料を考えるに当っては、やはり三村干のことが参考となる。『迎日冷水碑』(503年か)に「村主叟支干支」の人名がみえるが、これによると「村主」が官職、「叟支」が

人名、「干支」が官位である。同様に『蔚珍鳳坪碑』(524年)の「居伐牟羅異知巴下干支」、『丹陽新羅赤城碑』(545～550)の「鄒文村巴琰婁下干支」は、それぞれ「下干支」という官位をもった居伐牟羅の異知巴と鄒文村の巴琰婁という人物である。同様に明活山城作城碑(551年)にも「下干支」が確認される⁽³⁾。ところが『昌寧真興王巡狩碑』(561年)の「村主牟聰智述干」、『南山新城碑』(591年)の「貴干」・「撰干」・「上干」・「次干」などをみると、これ以後は「干支」の表記は例外なく「干」となっている。

当面の列伝(7)は「水酒村干伐宝靺」などとしているが、これは「干」の官位をもつ水酒村の伐宝靺という人物の意である。そしてこの「干」の表記は干支が干と変化した後のものであるから、列伝原典は550年代以後の成立ということになる。一方、(7)の「干」は、『迎日冷水碑』の「干支」と同じく、外位が分化する以前に地方首長に与えられた官位で、『蔚珍鳳坪碑』以下にはみえないものである⁽⁴⁾。堤上関係記事の原史料は『蔚珍鳳坪碑』以前に成立し、そこでは「干支」とあったことが推定されるのである。堤上関係記事の原史料は五世紀にも遡る古伝であったといえるのである。

それでは、本紀の「堤上奈麻」と列伝の「歆良州干」についてどう説明するかである。この点で両所伝は異質であり、本紀によれば、堤上は王京人であるが、列伝によれば歆良出身のようにとれるのである。事実、金龍善氏は「干」を重視して、堤上を歆良に独立に勢力を維持し

(3) 朱甫噉「明活山城作城碑の力役動員体制と村落」(西岩趙恒来教授華甲紀念『韓國史學論叢』ソウル、1992年)

(4) 朱甫噉「6世紀初、新羅王権の位相と官等制の成立」『歴史教育論集』所収、13・14、大邱。ただし朱氏は、『蔚珍鳳坪碑』の「下干支」を『迎日冷水碑』の「干

支」に相当するとするが、ここでは表記を問題にしているので、それについてはたちらない。また『史記』職官志には外位の7番目を「干」としているが、これは外位が分化した段階のもので、『迎日冷水碑』の原初的な「干支」とは質的に区別されるものである。

た地方勢力家とみなし、「奈麻」については、堤上が上京して受命する際に授けられた官位と解釈した⁽⁵⁾。また列伝の堤上の系譜、「始祖赫居世之後、婆娑尼師今五世孫、祖阿道葛文王、父勿品波珍瀆」や、死後に大阿瀆を追贈されたという記事、あるいは末斯欣が堤上の娘を妻としたとする記事によれば、堤上は王京人であるばかりか、真骨出身者となるが、それは事実ではないと否定するのである。

金説は、「州干」の「干」が本来の原史料のものであるということを前提にして、ある程度成立しうる可能性があるのであるが、その前提は必ずしも証明されたものではない。「州」が後の付会であるなら、「干」もそうである可能性が少なくないのである。反対に、「奈麻」は原史料に出ること疑問の余地なく⁽⁶⁾、そうであれば、それに基づいて堤上を王京人とするのが順理と考えられるのである。

慈悲麻立干紀6年(463)2月条、「倭人侵歆良城、不克而去」によれば、5世紀の歆良は歆良城と認識されていた。したがって原史料には、「歆良(城)堤上奈麻」のような表現があったと推測されるであろう。列伝原典は「歆良(城)」を当代風に「歆良州」と改めた際、堤上の歆良での地位が原史料では明確でなかったことや、京位が地方人にも等しく与えられた7世紀後半以後の事情を背景に、堤上を王京人と考えずに、歆良の有力者と判断して、堤上を推薦した3「村干」を参考に、「歆良州干」と記した、というような道筋も充分考えられるのである。

堤上は王京人であることが確認されれば、真骨出身でなかったも一向かまわないのであるが、列伝記事を全て否定するのも穏当ではない。少

なくとも列伝原典は堤上を真骨出身とみなしていたことは確かであるし、また末斯欣が堤上の娘を妻としたということまでも否定するのは行き過ぎであろう。金氏は奈麻は真骨出身として余りにも位が低いとするが、そうともいえない。例えば後の例になるが、金陽伝に

太宗大王九世孫也、曾祖周元伊瀆、祖宗基蘇判、考貞茹波珍瀆、皆以世家為將相、陽生而英傑、太和二年、興徳王三年、為固城郡大武(守か)。

とあって、金陽は真骨出身であるが、初の任官では郡太守となっている。一方、職官志・外官条には「郡太守百十五人、位自舍知至重阿瀆為之」とあって、郡太守は13舍知より6阿瀆の官位で就任したから、11奈麻には十分な資格があった。金陽もそれ位の官位と考えてよく、真骨出身であっても初期は奈麻で少しも異常なことではない。6世紀の金石文はそれをもっと明確に裏づけている。『蔚珍鳳坪碑』(524年)の「悉支軍主喙部尔夫智奈麻」、『磨雲嶺新羅真興王巡狩碑』(561年)、「太等」名中の「及珖夫知奈末」によれば、奈麻在位者は時として州の長官である軍主にも、貴族会議成員の太等にもなったのである。

要するに、史料の性格からして、堤上は奈麻の官位をもった王京人で、418年当時、歆良に派遣されていた人物と考えられるが、それではどうして堤上が歆良に派遣されていたのか、そしてなによりも、なぜ高句麗と倭を相手とする2王子救出の適任者として選ばれたのかということである。それは堤上が「剛勇而有謀」であるとともに、高句麗・倭に既に接触し、その内情を熟知していたからであろう。『広南土王碑

(5) 金龍善「朴堤上小考」『全海宗博士華甲記念史学論叢』所収、ソウル、1979年

(6) 「奈麻」は『迎日冷水碑』にみえる、干支系官位以

外の唯一の官位で、それは5世紀に遡る原初的なものと考えられる。

文』によって明らかのように、永樂10年(400)、高句麗軍は倭軍を追撃して任那加羅従拔城を占領した。堤上はこの時を前後して敵良に派遣され、高句麗・倭の両軍と接触していたのであろう。もう少し端的に言えば、堤上は高句麗軍を先導して任那加羅従拔城に至り、その後も最前線の敵良城で、高句麗と提携して倭の問題に対処していたと推測されるのである。

2. 『書紀』の毛麻利叱智関係記事

『書紀』は、「神功皇后新羅征討物語」に于老と堤上事件を付会した。それは歪曲といえるものではあるが、そのかわり、計らずもこの両事件に関する史料を補充したことになる。関係記事は長文なので、支障のない部分は簡単に要約して示すと次のとおりである。

- (8) (神功摂政前紀冬十月) 神功が新羅を降伏させた時、新羅王波沙寐錦は微叱已知波珍干岐を質として差し出した。
- (9) (同十二月条分注、第1の「一云」) 神功の新羅征討によって、新羅王宇流助富利智干が降伏した。
- (10) (同分注、第2の「一云」) 新羅王を斬殺して埋め、新羅宰一人を置いて還った。新羅王妻が宰を殺したので、天皇が軍船を派遣した。新羅国人は王妻を殺して謝した。
- (11) (神功紀五年春三月) 新羅王遣汗礼斯伐・毛麻利叱智・富羅母智等朝貢。仍有返先質微叱許智伐早之情。是以、詵許智伐早、而給之曰、使者汗礼斯伐・毛麻利叱智等、告臣曰、我王以坐臣久不還、而悉没妻子為孥。冀暫還本土、知虛実而請焉。皇太后則聽之。因以、副葛城襲津彦而遣之。共到対馬、宿于鉏海水

海。時新羅使者毛麻利叱智等、竊分船及水手、載微叱早岐、令逃於新羅。乃造葛靈、置微叱許智之床、詳為病者、告襲津彦曰、微叱許智忽病之將死。襲津彦使人令看病者。即知欺、而捉新羅使者三人、納檻中、以火焚而殺。乃詣新羅、次于蹈鞠津、拔草羅城還之。是時俘人等、今桑原・佐廩・高宮・忍海、凡四邑漢人等之始祖也。

一連の記事で、微叱已知波珍干岐 (8)・微叱許智伐早 (11) と記されたのは未斯欣で、毛麻利叱智 (11) は、(7)の『史記』朴堤上伝分注に「或云毛末」とあるのでわかるように、堤上のことに他ならない。また宇流助富利智干 (9) は于老のことである。

(11)は全文が検討対称となるので、まずそれからみてゆく。ここに葛城襲津彦と桑原・佐廩・高宮・忍海の四邑漢人が登場するが、これらの記事は本文完成段階で付会されたもので、その関係地名である鉏海水門・蹈鞠津・草羅城は、5世紀後半以後に倭国に移住したこれら四邑漢人の移住伝承から、その移住コースを逆にあげたものに過ぎない⁽⁷⁾。

(11)は、新羅王が使者を派遣して微叱許智を救出する内容であるが、その人名のあげ方に不審な点が存する。つまり、

- ①新羅王遣汗礼斯伐・毛麻利叱智・富羅母智等朝貢
- ②使者汗礼斯伐・毛麻利叱智等、告臣曰
- ③新羅使者毛麻利叱智等、竊分船及水手、載微叱早岐、令逃令新羅

④捉新羅使者三人、納檻中、以火焚而殺
 などとあり、①④によれば新羅使者は3人で、その筆頭は汗礼斯伐であるはずであるが、③で

(7) 拙稿『『日本書紀』雄略紀の対新羅関係記事』『大阪

経済法科大学アジア研究所年報』6、1994年

は毛麻利叱智だけがあげられているということである。この点に注目した木村誠氏は、汗礼斯伐を地名と考え、④の「三人」については、①の「汗礼斯伐以下を人名と解釈したうえでの挿入である可能性もある」としながら、堤上を汗礼斯伐（蔚山に比定する）の在地首長であると結論づけた⁽⁸⁾。しかし、①の汗礼斯伐以下を人名と解釈して④に「三人」と付け加えたとするならば、③も当然、「新羅使者汗礼斯伐等」、あるいは「新羅使者汗礼斯伐・毛麻利叱智等」と手を加えたはずではなかろうか。なお疑問は残るというべきである。

最も問題は、(11)では末斯欣のことを微叱許智伐早・許智伐早・微叱許智と表記していて、それらは一応の統一性が保たれているのになが、③の微叱早岐だけが異質で、それはかえって(8)の微叱已知波珍干岐に通ずる（干と早の相違はミスと処理することが可能である）ということである。(8)の微叱已知波珍干岐と(11)の微叱許智伐早はどうみても異質であるから、それは原典の相違を反映しているといわざるをえない。そうすると、(8)は末斯欣を微叱已知波珍干岐とする原典⑧に基づいたもの、(11)は微叱許智伐早とする原典④に基本的にに基づきながら、③だけは⑧から借用したものであるということが出来る。そして⑧は新羅使者として毛麻利叱智だけをあげ、④は汗礼斯伐以下3人をあげていたことになる。汗礼斯伐はやはり人名とみるのがよく、それは通説のように、伝承過程で于老の名が混入したものと考えられるであろう。既述のように、史料的には堤上は王京六部人で、決して地方の在地首長者ではないのである。木村氏は、「倭国に赴いた堤上はみづからを汗礼斯伐の首長と名乗った」ので、『書紀』に堤上の出身地がわざ

わざ記されたとするが、5世紀前半の倭国で、だれがこのようなことまで筆録し、どのような過程を経て『書紀』編纂時にまで伝えられたというのであろうか。極めて疑問というべきである。

さて、(9)の「一云」は、神功紀の原典の1つと解されるが、それは既に于老事件を「新羅征討物語」に結びつけている。引用を省略した、神の託宣や仲哀の死の部分など、固有名詞の表記を含めて本文によく対応しており、ただ本文はそれに潤色を加えられているだけにみえる。この原典「一云」⑨は、『書紀』編纂に際し、修史局の第一次事業として、ある于老に関する原史料を「新羅征討物語」に付会して編纂されたものということができる。⑧・⑩も、⑩の原典⑩も同様なのである。そうすると、⑪は(11)の本文に利用され、それは堤上らの話から始まっているが、もう一人の主人公の末斯欣が登場するから、⑩も新羅王降伏記事をもっていたことになる。それはおそらく⑨と関連すると思われる。

⑨・⑩は于老事件を付会したものであるが、⑨は于老（宇流助富利智干）が降服したとし、⑩は新羅王が虐殺されたので、その妻が新羅宰を殺して復讐したとする。『史記』昔于老伝に付合するのは⑩であるから、⑨はその改作であることがわかる。つまり、⑨・⑩はもともと同一の原史料に基づいていたが、『書紀』修史局の第1次編纂者が2通りの筋書きを用意したということであろう。そして⑨の場合、于老が降服して人質を差し出したということになる。そうすると、⑨こそ⑩の前半部分となり、⑨と⑩はひと続きの原典と考えられるのである。この原典は、于老に関する原史料と、それとは関係

(8) 木村誠「新羅国家生成期の外交」、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史』2所収、

東京大学出版会、1992年

のない堤上に関する原史料を前後につないで、新羅王降服と未斯欣入質譚をつくりあげたということになる。その場合、(9)に宇流助富利智干、(11)に汗礼斯伐と、同一人物が異人物として登場して矛盾するが、それは原典が別人物と判断したからに過ぎない。

ここで⑧の「新羅王波沙寐錦」について言及しておきたい。この王は『史記』では婆娑尼師今と記され、2世紀初頭に存在したことになっていて、堤上とは時代が全く異なる。この王名がここに登場するのは、堤上を「婆娑尼師今五世孫」とする、(7)の列伝所伝と関係するであろう。即ち、⑧は新羅使者として堤上一人の名をあげていたのであるが、その堤上は波沙寐錦後孫であった。それが伝承の過程での混乱からか、ここに新羅王として登場することになったのであり、それ以外の理由は考えられない。このことからすると、(7)の堤上系譜は7世紀末までには完成しており、それは堤上の姓である「朴」を含めて、列伝原典にあったものであることがほぼ確認されるのである。

以上のように、これら神功紀の記事には、堤上に関する二つの原史料と于老に関する一つの原史料が存在したと考えられるが、それではそれらの原史料はいつ筆録されたかということである。

まず宇流関係の原史料⑨・⑩であるが、『史記』昔于老伝にある于老の死とその妻の復讐譚は、「倭国使者葛那古在館」、「倭国大臣来聘」などを前提としているから、新羅での伝承成立自体が新羅・倭間の国交成立以後、しかもまだ新羅・倭間の緊張が続いていた頃、具体的に言えば、570年代～610年頃であろう⁽⁹⁾。したがっ

て、⑨・⑩の原史料が筆録されたのは6世紀末以後ということになり、⑪もほぼ同様に考えられる。

⑧は、微叱已知の官位名表記「波珍干岐」によれば、6世紀中葉までには一端筆録されていたということになる。なぜなら、6世紀中葉を境に「干岐」は「干」に変わるからである。「寐錦」の語もそれを傍証している⁽¹⁰⁾。そして「波沙寐錦」によれば、その時には既に朴姓を除く堤上の系譜も基本的には成立していたことになる。

于老と堤上に関する原史料は吉士集団によって伝えられたと考えられる（それは新羅で筆録されたのを伝えたという可能性もあり、吉士集団が伝聞した内容を筆録した可能性もある）。継体24年（530）と欽明23年（562）に「任那」に派遣された調吉士氏は、新羅と接し、当時の詳細な記録を伝えている。また敏達4年（575）以後、吉士集団はしきりに新羅に派遣されている。外交集団である吉士集団こそ、于老と堤上の原史料の提供者にふさわしいのである。

最後に、神功紀の編纂過程についてもう一度整理しておく。

「神功皇后新羅征討物語」は『古事記』にあるとおり、素朴な形で『書紀』以前に成立していた。『書紀』編纂に際して、この「新羅征討物語」に于老と堤上事件が付会されたが、それは第1次作業段階でのことである。この時、于老原史料1つと堤上原史料2つを用いて、3つの原典が編纂された。そのうち2つは新羅王を宇流とするもので、1つは宇流が殺されたところで終り、もう1つは宇流が降服して人質を差し出す筋書きであるが、この部分に堤上原史料

(9) 拙稿『『三国史記』新羅本紀の倭関係記事』上田正昭編『古代の日本と東アジア』所収、小学館、1991年、同「＜任那＞の滅亡と＜任那の調＞」『東アジア研究』

7、1994年

(10) 「寐錦」の語は『蔚珍鳳坪碑』（524年）の「寐錦王」を最後に、基本的に途絶える。

の1つ、微叱許智伐早史料が用いられた。原典の3は、新羅王を波沙とし、波沙寐錦が降服して微叱已知波珍干岐を質として差し出したという内容である。『書紀』編纂の第2段階では、これらの原典を用いて一応の本文（稿本）が執筆されたが、稿本執筆者は、新羅王を宇流とする原典を採用せず、波沙寐錦・微叱已知波珍干岐原典によって前半を、微叱許智伐早原典によって後半を作ったのである。ただし作文の便宜上のためか、後半の一部③は前半原典を参考にしたのである。第3段階の完成者は、稿本の本文に潤色を加えながら本文を完成し、同時に稿本と異なる原典の異伝を注記した。潤色は多岐に及んでいると考えられるが、葛城襲津彦と四邑漢人記事などは、その一例である。

3. 『遺事』の堤上記事

『遺事』の堤上に関する所伝は、紀異第一の「奈勿王・金堤上」条に著録されている。その基本的内容は、歙羅にいた堤上が倭と高句麗に抑留されていた訥祇王二弟を救出することに成功したが、倭の木島で惨殺されたということで、『史記』と同様である。細部でも、堤上が叛臣を装って倭に赴いたことや、堤上の妻が栗浦まで追ってきたことなど、『史記』の所伝と共通している。しかし一方、『史記』列伝が堤上の姓を「朴」としているのに対し、『遺事』の題目は「金」としていること、末斯欣・ト好を美海（分注。一作末吐喜）・宝海と表記し、美海渡倭・宝海入麗年を那密（奈勿）王即位36年庚寅（390年。『史記』では402年）・訥祇王即位三年己未（419年。『史記』では412年）、美海・宝海の帰国年を訥祇王10年乙丑（425年。『史記』で

は418年）としていることや、その他、相違点が少なくない。史料の性格からすると、『史記』によるべきこと当然のことと考えられるが、今なお『遺事』に重きを置かんとする傾向が強く、ひき続き論ずべき点となっている。

さて、『遺事』の編者一然は、ある原典をここにほぼ忠実に転載したと考えられるが、以下にはその原典を「金堤上傳」として話を進めることにする。

「金堤上傳」の性格を検討するに当っては、その最終的な成立年代から問題にしなければならない。

まず、美海・宝海に随従した人物として、内臣朴娑覧・金武謁、倭国に在って美海とともに帰国した人物として、鷄林人康仇麗の名があげられていることに注意される。朴娑覧・金武謁などの人名は7世紀以後のものであることに相違なく、康仇麗に至っては新羅末～高麗初に付会されたものと考えられるのである⁽¹¹⁾。

美海・宝海に関する記事も時代が下がる。美海渡倭に関しては、「倭王遣使来朝曰、寡君聞大王之神聖、使臣等以告百濟之罪於大王也」とあって、倭王が新羅王に百濟の罪を告げるなどとしているが、当時、百濟・倭は同盟して新羅に敵対していたから、そのようなことはありえないのである。これは、当時の情勢や、美海渡倭の事情が忘れられた時点での作文であろう。宝海に関しては、堤上与宝海が高城水口で落ち合って逃げ還ったとあるが、訥祇王代には高句麗軍が新羅王都に駐屯したばかりでなく、嶺南の新羅北部領が占領されるなど、新羅が高句麗に最も強く隷属していた頃である⁽¹²⁾から、それは現実的にはありえないことで、堤上が長寿王を説得したとする『史記』の所伝が事実に近い

(11) 朴姓の確実な初見は668年の朴京漢（『史記』文武王紀8年条）、康姓は913年の康瑄詰（『高麗史』太祖即

位前紀・乾化4年条）である。

(12) 注(2)、拙稿

い。もともと高城なる地名は『史記』地理志・溟州条に

高城郡、本高句麗達忽、真興王二十九年、為州置軍主、景德王改名、今因之。

とあるのによれば、景德王代以後のものなのである。

美海逃還と堤上惨死の部分に関しては、「鷄林人」・「鷄林王」・「鷄林之臣」などの表現が一貫してみられ、「新羅」という語を一つも用いていないことが注意される。鷄林は啄評(『梁書』)の対訳で起源は旧いが、国名としては斯盧(『三国志』)、新羅(『広開土王碑文』)、斯羅(『迎日冷水碑』)であって、決して鷄林とはしなかった。新羅の別称として鷄林が用いられた確かな例は、文武王3年(668)に唐が新羅を鷄林州大都護府とし、文武王を鷄林州大都督に任官したのが最初である。新羅人自身も、金大問の著者『鷄林雜伝』の例でわかるように、その頃にはこの語を用いていた。しかし唐の任官の場合、「新羅州大都督」では余りにも露骨に新羅の国家的存在を否定することになるので、「鷄林州」としたということであろうし、金大問の場合にしても、それは多分に文学的表現として用いられているのである。8・9世紀の金石文にも、鷄林の語が東国・海東・青丘などの語とともに文学的表現として用いられているが、それは正式の国名として使われているのでは決していない。例えば、『慶州崇福寺碑銘』(896年)では海東・鷄林の語がみられるが、「新羅国」・「新羅国王」とあって、「鷄林国」・「鷄林王」などとは決してしていないのである。「鷄林王」なる語は新羅人が使ったとは考えられず、新羅代には「鷄林人」も確認されない。

「鷄林人」の最古の実例は『海州広照寺真澈大師宝月乘空塔碑銘』(937)で、続いて『楊平菩提寺大鏡大師玄機塔碑銘』(939)、『栄豊毘盧

庵真空大師普法塔碑銘』(939)、『溟州地藏禪院朗円大師悟真塔碑銘』(940)などであるが、要するにそれは、高麗初期に後三国時代の新羅人を指して用いた語なのである。

「鷄林国」は高麗文宗代(1047~1083)が初見である。文宗代に李子淵の妻楽浪郡金氏が鷄林国大夫人に封ぜられた(『高麗史』李子淵伝)のがそれで、さらに金氏の娘が文宗との間に生んだ熙は、文宗19年(1065)に鷄林侯に封ぜられている(『高麗史』肅宗即位前紀)。これを要するに、「金堤上傳」の「鷄林王」・「鷄林人」・「鷄林之臣」などの語は、高麗初期のもので、一然の頃のものでもない。

「金堤上傳」の完成が高麗代にまで下ることは確実と思われるが、だからといって、そこに古伝が全くないということではもちろんない。堤上の官職は「敵羅郡太守」とされているが、「郡太守」は後世の付会であっても、「敵羅」は当初からの古名である。そしてまた、堤上の活躍が訥祇王三兄弟に関連するものであること、堤上が栗浦から倭に向い、木島で殺されたことなども古伝に基づくものである。

「金堤上傳」の成立について考えるとき、それが鷄述神母の縁起譚になっていることを無視できない。つまり末尾に

初堤上之薨去也、夫人聞之追不及、及至望徳寺門南沙上、放臥長号、因名其沙曰長沙、親戚二人、扶腋將還、夫人舒脚、坐不起、名其地曰伐知旨、久後夫人不勝其慕、率三娘子上鷄述嶺、望倭国痛哭而終、仍為鷄述神母、今祠堂存焉。

とあって、堤上の妻は神文王5年(685)に創建された望徳寺付近に地名を残し、最後は鷄述神母となったという。「今祠存焉」とあるので、高麗代に祠堂があったことがわかるが、『新增東国輿地勝覧』慶州・祠廟条にも同様の記事が

あり、「其村人至今祀之」とあることからすると、李朝代にもひき続いて祀られていたのである。堤上の妻が望徳寺・鵠述嶺に結びつけられたのは、慶州から堤上が出港した蔚山の栗浦に向う蔚山街道沿いに位置していたからであろう。

特に鵠述嶺は、その南麓に「日本賊」を防ぐための長城が築かれたことが注目される。聖徳王紀21年(722)条に、「築毛伐郡城、以遮日本賊路」とあり、『遺事』孝成王条に、「開元十年壬戌十月、始築関門於毛火郡、今毛火村、属慶州東南境、乃防日本塞垣也」とある毛伐郡城、あるいは関門城がそれである。この毛伐郡城は慶尚北道と南道の境に今も遺跡が残っているが、その石築址は西は鵠述嶺の南側から、東は三台峰の南側までの12キロメートルにわたって、蔚山街道を遮断しながら築かれており、蔚山からの侵入者を防ぐには恰好の長城となっている。

現地踏査の報告によれば、鵠述嶺は八つの嶺からなるが、堤上の妻が登ったのは標高765メートルの嶺で、そのすぐ下に望夫石があり、望夫石上に立つと蔚山湾一帯が指呼の間にあるばかりか、東海一帯も望見できるという。また望夫石周辺には新羅瓦が散布しており、頂上の台地には高麗建築址が確認されたという⁽¹³⁾。

長城東端の延長上には、楕円形の周約1.8キロメートルの石築山城があって、新垓里城と称されている。山城からはやはり蔚山湾と東海が一望の下にあるが、これは長城より早い、7世紀後半頃の築造であろうという⁽¹⁴⁾。堤上の妻が新垓里城に祀られたのではなく、長城を眼下に見下ろす鵠述嶺に祀られたのは、やはり長城築造後のことであろうことが容易に推測させる。美海・宝海の表記も、鵠述嶺からの眺望と関係

するのであろう。

「金堤上傳」は鵠述嶺神母の縁起譚としての性格をもっていることからすると、この長城建設がその成立の契機になったと考えられる。堤上が「歃羅郡太守」として、歃羅の古地名が残されたのは、当時、歃羅が依然として歃羅(州)であったからであろう。「郡太守」については、聖徳王～景德王代に歃羅が一時郡となり、実際に太守が派遣された反映であるかもしれないが、それよりやはり原伝は歃羅(城)であって、歃羅の沿革、というより歃羅という地名自体が忘れられた新羅末～高麗初に、適当に「郡太守」が加えられたとみる方が自然であろう。

要するに、「金堤上傳」は、倭と高句麗に抑留されていた訥祗王二弟を、歃羅にいた堤上が救出したが、倭の木島で惨殺されたという原伝を出発点として、長城建設を契機に新たに鵠述嶺神母の縁起譚として次第に完成されたもので、その最終的な成立は高麗初までは下がると考えられるのである。

「金堤上傳」の著しい特徴は、堤上事件の核となる実聖王の存在が完全に脱落していることである。そもそも事件は、奈勿王が実聖を高句麗に入質したことにあった。そのため実聖は奈勿王子に復讐を果そうとして、2人の奈勿王子を倭と高句麗に派遣したのであるから、史実を伝えようとする立場からは、実聖の存在が欠かせないはずである。しかし「金堤上傳」は鵠述神母の縁起譚として、史実を伝えることより、堤上の壮烈な死とその妻の哀活を語ることが主眼としていた。その伝承から複雑な史実が消えていくのは自然の勢いであり、実聖の脱落はそこに原因があったというべきであろう。

(13) 鄭永鎬「三国遺事考古学」『新羅文化祭祀記念論文集』1所収、1983年。『三国遺事研究論選集』(1)(ソウル、1986年)に転載。

(14) 朴方龍「新羅関門城の銘文石考察」『美術資料』31、ソウル、1982年

この点、朴堤上傳の(7)は参考に供することができる。そこでは「(実聖) 王嘗恨奈勿王使己質於高句麗、思有以釈憾於其子」と、実聖の未斯欣・ト好派遣理由を簡単に述べているが、「及訥祇王即位」と、訥祇が実聖を弑して即位したことなどは全て省略している。(7)は末尾に、「王自作歌舞、以宣其意、今郷樂憂息曲是也」とあって、憂息曲の説明となって終わっている。即ち、列伝原典は憂息曲の由来譚であったことが推測され、その原典とは具体的には金大問の『樂本』などを想定できるが、憂息曲の由来譚というその性格からして、実聖の存在は稀薄になりつつあるのである。もちろん、本紀と列伝は相補っており、本紀には堤上の死に関する記事もないから、これは重複を避けた『史記』編者の調整もあった。しかし実聖のことは、堤上個人の伝記、あるいは憂息曲由来譚としては、最早必須のものではなく、列伝は本紀なしに充分首尾完結しているのである。列伝は原典の文に比較的忠実であったと考えられるが、それは、堤上事件の原史料から「金堤上傳」への過渡的形態を示しているものと評価できよう。

「金堤上傳」から実聖が脱落したのと、それが美海渡倭を那密王代に、宝海入麗を訥祇王代にかけたのとは、無関係ではなかろう。即ち、それは実際は実聖王代のことであったが、実聖王の存在が完全に脱落し、これらの年次も不明確であったので、結局、那密・訥祇両王代にかけられたということであろう。後述のように、「金堤上傳」は那密王の存在を強く意識していたのである。

「金堤上傳」の年紀に関して末松保和氏は「那密王即位三十六年庚寅」と「(訥祇王) 十年

乙丑」をとれば、その両王の即位年は『史記』とそれぞれ1年の差が生じ、それはこの前後の時代に当る広開土王の即位年が、『史記』と『広開土王碑文』で1年のずれがあるのと相応するので、「那密・訥祇の場合も、遺事を採用するのが正しいであろう」と説いた⁽¹⁵⁾。末松説は主に紀年について論じたのであるが、末松説を受けた三品彰英氏は、年次も『遺事』に従うべきであるとし⁽¹⁶⁾、それは今日にも大きな影響を与えている。

しかし、かりに末松説によったとしても、それはあくまで紀年の問題であって、事件の年次の信憑性とは無関係なのはもちろんのことである。それは「金堤上傳」執筆者が依拠した新羅王暦がそのようなものであったということとどまる。しかももう一つの年次、「訥祇王即位三年己未」は『史記』と一致し、これが正しいとすると、「十年乙丑」は明らかに誤りで、それは「丙寅」とならなければならない、ひいては「那密王即位三十六年庚寅」にも疑いが及ぶことになる。末松説の根拠も基本が動揺しているのである。

木村氏は、『史記』と『遺事』の「各所伝には相応の史料的根拠がある」と説く一方、新羅は広開土王即位前後に高句麗と倭の双方に人質を派遣していた」とする⁽¹⁷⁾。「広開土王即位(391年)前後に」、「双方に」となれば、それは美海と実聖のことになる。つまり木村氏は、美海(未斯欣)渡倭年に関しては『遺事』の390年を採用し、『史記』の402年を否定しているわけであるが、これは極めて便宜的な論法であろう。このような論法が一般的に通用しているのが現状で、その流れからは、最初から『史記』

(15) 末松保和『新羅史の諸問題』東洋文庫、1954年、140～144ページ

(16) 三品彰英『日本書紀朝鮮関係記事考證』上、吉川弘

文館、1962年、93ページ

(17) 木村誠、注(7)論文

を無視し、未斯欣は「390年に倭の人質となっていた」と断定する論者も出る⁽¹⁸⁾ということになる。これらはいずれも学問的考証を経たものとはいいがたく、未斯欣渡倭年は、『史記』によって402年頃とするのが正しいのである。

さて、最後に残る問題は、堤上が活躍したのは訥祇王代であるのに、一然なぜ「奈勿王」の題目の下に「金堤上傳」を採録し、またなぜ堤上の姓を朴氏とせず、金氏としたのか、ということであろう。この問題は難解であるが、一応、次のような推測がなりたつと思われる。

『栄豊毗盧庵真空大師普法塔碑銘』(939年)には次の一文がある。つまり、

□□□□運俗姓金氏鷄林人也其先降自聖韓興於卬勿

とあって、金氏の始祖は聖韓であるが、卬勿(奈勿)に興ったとあり、これによると、高麗初期には奈勿王こそ金氏有国の始祖と認識されていたことがわかる。しかしこれは高麗初期ににわかに強調されたのではなく、宣徳王が「奈勿王十世孫也」、元聖王が「奈勿王十二世孫」を称したことを考えれば、このような考えは8世紀後半頃から端を発していたのである。この頃から奈勿王に対する崇拜が高まり、金氏王にとっては、奈勿王代こそ実質的な開国の時代として把握されていたのである。このような風潮のなかで堤上事件は、訥祇三兄弟に関する事件というより、奈勿王開国に続く奈勿三王子の事件として把握されたと考えられるのである。つまり、「金堤上傳」は、東海を観望する鵝述嶺を舞台に、金氏王朝の苦難に満ちた開国の歴史の一端として伝承され、完成されたもので、そこに高城・栗浦の地名が強く意識されるとともに、堤上が金氏とされた理由があったと理解さ

れるのである。もちろん、これは一然の認識ではなく、「金堤上傳」の認識であるから、もともと鵝述嶺神母に関する伝承には、一然がそう理解するだけの記録があったと推定される。その確証はないが、「奈勿王・金堤上」の題目は、それを暗示すると考えられるのである。

おわりに

堤上事件に関する『史記』と『遺事』の記録は、それぞれに貴重ではあるが、その所伝に相違があり、史実を確定するうえに困難をもたらしていた。特にこの事件は、高句麗広開土王の歴史的な南進と深く関わっているのも、その年次が重要な意味をもっているが、まさしくそこに両所伝の最も大きな差異が存したのである。特に400年を境に、新羅には高句麗兵が駐屯し、新羅は高句麗に臣属したと考えられる⁽¹⁹⁾ので、未斯欣渡海年が402年(『史記』)と、390年(『遺事』)では、その歴史的意味が大きく異なってくるのである。しかし今までの通説は、両所伝がそれぞれに根拠があるとしながらも、結局は390年説を生かし、広開土王即位(391年)前後の頃に、新羅は高句麗と倭に両属したとか、二重の人質外交を展開したと、安易に説いてきたといえる。

既に本稿で明らかにしたように、未斯欣渡倭年は『史記』により402年頃(少なくとも400年以後)とされなければならない。当時、新羅は高句麗に臣属し、倭は百済と同盟してひき続いて高句麗と対抗していたから、新羅が倭に従属するなどという事態はありえないことなのである。『史記』は、実聖王が倭国と「通交」・「講和」して未斯欣を「質」としたとあるが、字義

(18) 角林文雄「高句麗広開土王碑文にみえる各国の戦略」(横田健一編『日本書紀研究』19、塙書房、1994年)

(19) 注(1)、拙稿。以下もこれによる。

どおりの「講和」・「通交」がなかったと同様に、字義どおりの「質」ということもなかったのである。これらの語が意味をもつためには、新羅、倭間に一定期間の国交関係が持続していなければならないが、そのようなことは5世紀には実現しなかった。『史記』がこのような表現しているのは、その原典である「国史」(『国史』)が、高句麗による新羅支配を極力陰蔽しようとしていたことと、未斯欣が長期間抑留され、救出に向った堤上が犠牲になったことに関係する。「質」という語だけを絶対化して、当時の激動する国際情勢を判断することはできないのであ

る。402年頃に、未斯欣はおそらくは高句麗の意向をも受け、倭の出兵を思いとどまらせるために倭国に渡ったが、それは成功せず、抑留されてしまったというのが事実なのである。

『遺事』の「金堤上傳」は、史実としては問題が多い。しかしそれは、毛伐郡城が蔚山街道に建設されたのを契機に、新羅人が改めて堤上事件を回顧しながら堤上の妻の心情をおしはかり、その時々歴史意識を反映させながら伝承を発展させたものとして、新羅の貴重な精神文化遺産として評価されるべきものである。

